

「見証」「顕証」の成立と意味用法

——中国文献との比較による——

柚木 靖史

キーワード…漢語の意味用法、漢語受容、「源氏物語」の漢語

要 旨

一 研究の目的

本稿は、「見証」を取り上げ、その成立事情と、日本における意味用法について検討した。「見証」は、「源氏物語」などの和文においてはすべて平仮名で表記されることから、「顕証」との混乱が生じている。この点につき、和文、古記録、有職故実関係資料、古文書等、さまざまな分野の資料の用例に基づき、個々の意味を確認することにより、「見証」と「顕証」は別語であって、意味も異なることを指摘した。また、「見証」「顕証」は、漢籍や仏典に「見証」の用例があるものの「源氏物語」の「見証」とは意味が異なること、「顕証」は漢籍や仏典に用例が見られないことから、「見証」「顕証」とともに、日本で成立した語であると結論付けた。

「見証」は、漢語動詞「見証す」の語幹を構成する漢語で、「源氏物語」のような平安時代の和文にも使用されている。本稿では、平安時代の和文に使われる漢語の特質について明らかにするという立場から、「見証」という漢語の成立過程とその後の意味変化について述べる。

「見証」の成立と意味用法について考えるにあたり、主に次のような視点で考察を進めたい。

- 1 「見証」がどのように成立したか。
- 2 「見証」の意味を、時代ごとに追うこと。
- 3 「見証」と「顕証」が、「源氏物語」の古注釈（特に「河海

抄」で混乱していることを確認する。

4 「源氏物語」の「見証」の意味について、「顕証」の意味と関わらせて検討する。

5 「見証」と「眷属」の関係など、「見証」に関わる問題について整理する。

さて、『日本国語大辞典 第二版』¹では、「見証」の意味として、「①囲碁、すごろく、けまりなどの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと。」「②そばにいて、事のなりゆきを見ること。また、その人。見物。見物の場にもいう。」「③仏語。真の仏性を見きわめること。すでにさとっている自己を知ること。」とある。「源氏物語」の「見証」は、主に①の意味で使われている。ただし、「源氏物語」の「見証」に、②の意味での使用例も存する可能性について、後述する。①の意味は、「囲碁、すごろく、けまりなどの勝負を判定するため」のように行為の目的が限定されている。これに対して、②の意味は「事のなりゆき」とあるように行為の目的が限定的ではない。ただし、「そばで見る」という意味特徴は、①②の意味に共通して認められることから、①と②の意味には関連性がある。意味の変化という観点からみると、①と②の関係は、意味の拡大、意味の縮小ということになるかと考えられるが、用例を追うと、同時に①と②の意味が存することから、どちらの意味が先かということについては確

定しがたい。

なお、③の意味は、「仏語」とあるように、主として仏教に關する書で使われる「見証」で、用例としては、「正法眼蔵」などの例が挙げられている。なお、この③の意味が、中国の仏典から受容されたものであることは、後述する。

本稿では、先に述べたように、「見証」に関わる諸問題について、多方面の資料の用例に基づきながら検証していくこととする。

二 日本の古辞書における「見証」

まず、日本の古辞書から「見証」の例を検索すると、次に示すように「色葉字類抄」や「書言字考節用集」、「易林本節用集」に例が見られ、「ケンセウ」「ケンジヨウ」と読まれている。なお、「色葉字類抄」や「易林本節用集」で示された「シヨウ」「セウ」とある「証」の語頭の音が清音であったか濁音であったかということについては不明である。

○色葉字類抄（黒川本 中巻 99ウ4）²

見証 証拠分 ケンシヨウ

○書言字考節用集（第十一冊 言辭 九上 5丁裏5行目）³

—（見）証^{ケン}証^{シヨウ}

○易林本節用集（146／3）⁴

一 (見) 証

用語集としての性質を持つ節用集に「見証」が掲載されていることから、「見証」は日本において中世には広く使われた語であるといえよう。「色葉字類抄」に「証拠分」とあるのは、「見証」の意味が、「拠り所」を示す意味だということを示すのであろう。ただし、日本の「見証」の意味は、先にも挙げたように、「①開基、すころく、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」「②そばにいて、事のなりゆきを見ること。また、その人」であり、「証拠」という意味と合わない。この「証拠」という意味は、後に示す中国文献の意味にむしろ合っている。したがって、「色葉字類抄」の掲載語の意味は、中国の「見証」の意味を反映している可能性がある。

三 中国文献の「見証」

本節では、中国文献の「見証」の意味について確認し、日本文献で使われた「見証」の意味と比較する。

三—— 漢籍における「見証」

まず、『大漢和辞典』⁵⁾で「見証」の意味を確認すると、「①あきらかなしるし 証拠【淮南子、綴称訓 仁者積恩之見証也】」

「②証人【京本通俗小説見有両箇轡番見証、乞叫来問、碾玉観音】とあり、「見証」に加えて「見証人」の項を立て、意味を「証人」とする。「見証人」には、用例が挙がっていない。

中国における「見証」の意味のうち、①の意味は『日本国語大辞典 第二版』には掲載されておらず、②の「証人」の意味が、『日本国語大辞典 第二版』に掲載された①や②の意味に近い。しかし、『大漢和辞典』の②の意味の用例として挙がっている資料は、京本通俗小説であり、これは、早くとも宋代の資料である。また、「見証」とは別の項目として挙げられている「見証人」については、用例が挙げられていない。筆者は、中国文献に「見証人」の例を見出していない。おそらく、「見証人」は、日本文献の「見証人」の例を項目として立てているのではなからうか。このような状況を見ると、『日本国語大辞典 第二版』に挙げられている①②の意味は、日本独自の意味のようである。

さて、中国文献（漢籍）の「見証」としては、『淮南子』に例があるものの、今のところ、他の文献に「見証」の例を見出していない。次の例は、『大漢和辞典』にも①の意味の用例として挙げられている。

道者、物之所導也 德者、性之所扶也 仁者、積恩之見証也 義者、比於人心（卷十 繆稱訓 『新釈漢文大系』 55 淮南子

中
495頁⁷

右の例は、「仁は積み重ねられた恩のあきらかなしるしである」という内容で、ここでの「見証」の意味は、「あきらかなしるし」である。この意味は、『大漢和辞典』にある「①あきらかなしるし 証拠」にあたる。現在のところ、漢籍に見出した「見証」の例はこの一例であることから、漢籍の「見証」の意味について、確定的なことは言えないのであるが、中国の古代文献において「見証」は、それほど頻用された語ではなかったと考えるのが妥当であろう。また、「源氏物語」に見られる「見証す」のような動詞の例は、中国文献には見られない。したがって、漢籍の「見証」が、直に日本に輸入されたと考えるのは難しいであろう。このように、漢籍と日本文献の「見証」には、直接的な結びつきは認めがたいといえよう。

三―二 仏典における「見証」

中国文献のうち、仏典には多くの「見証」の例を見出すことができる。大正新修大藏經のデータベース⁸を使って「見証」を検索すると、256例が検出される。

ただし、検出された「見証」のなかには、文字列の一部としての「見証」もあるので、二字漢語の「見証」に相当するのかどうかという検証を個々に行う必要がある。

以下、形式と意味の関係を視点として、検出された「見証」を分類する。

(1) 「知見証」という形式で現れるもの

1 佛本行集經六十卷／卷二十四 勸受世利品下 精進苦行
品上／精進苦行品、自度一身、徒受苦惱、不喜不樂、不能
知見証上仁法無畏之處。

2 佛本行集經卷第二十四 如是如是。是諸沙門。婆羅門等。
雖不行欲。乃至不能知見証法。此第二喻。世未聞有。

3 佛說力士移山經一卷 佛無諸漏終始永盡無復縛著、神真觀
智自知見証、究暢道行可作能作無餘生死、

4 太子瑞應本起經二卷卷下 佛漏已盡、無復縛著、神真觀
智、自知見証、究暢道行、可作能作、無餘生死、

「見証」で検索できる文字列としては、「知見証」が多い。用例2の「佛本行集經」の該当箇所を読み、『国訳大藏經』で確認すると、5のように「知見し証する」と解している。意味は、「見て知って、真理を明らかにする」という意味を表すのであろう。したがって、「知見証」は、「知見」と「証」に分かれ、「知見」が「証」を修飾すると解することができる。よって、「知見証」は、漢語の「見証」の例とはいえない。

5 是の諸沙門及び婆羅門等、欲を行ぜずと雖も、乃至、法を
知見し証する能はず（557頁2行目 国訳佛本行集経 精進苦
行品 第二十九の上）。

（2）「眼見証」「法見証」

文字列として「眼見証」「法見証」も複数の例を検出することが
できる。「眼見証」は「眼で見ること、すなわち眼見によつて
真理を明らかにする」という意味と解され、「法見証」は、「法
の力で見ること、すなわち法見によつて真理を明らかにする」
という意味であると考ええる。よつて、これらの「眼見証」「法見
証」も、「知見証」と同じように「眼見」と「証」、「法見」と
「証」に分けられるのであろう。このように「眼見証」「法見証」
も「見証」という二字漢語の例とは考えにくい。

6 般泥洹經二卷 卷上 受道之諦、得眼見証、為盡是生、後
不復有。

7 佛說諸法本無經三卷 卷下 常出如是等聲。若聲出時。彼
諸眾生於法見証。「彼時如來初集、聲聞有九十九俱致、」

（3）「見証驗」「見証法」「見証相」「見証知」「見証明」「見証地」

「見証」が名詞を修飾する形式としては、表題に掲げる「見証
驗」「見証法」「見証相」「見証知」「見証明」「見証地」がある。
8の「見証驗」は、「はつきり表れたしるしとしての驗」という
意味であらう。したがつて、この「見証」は二字漢語で、「驗」
を修飾しているのであろう。9の「見証法」も、「はつきり表れ
たしるしとしての法」という意味であらう。10の「見証相」、11
の「見証知」、12の「見証明」、13の「見証地」も、それぞれ
「はつきり表れたしるしとしての相」「はつきり表れたしるしと
しての知」「はつきり表れたしるしとしての明」「はつきり表れ
たしるしとしての地」という意味であらう。これらの「見証」
の意味は「はつきり表れたしるし」という意味で、先に挙げた
淮南子の「見証」の意味と同じであらう。

8 寂志果經 又云何不蝕、當雷電霹靂、如是之像、常見証
驗、沙門道人、已遠離此、是謂賢聖、

9 起世經 卷十 最勝品之餘 能盡諸漏、心得解脫、智得解
脫、現見証法、得諸神通、既作證已、

10 佛所行讚 卷一 厭患品 觸類無所擇、雖有壯色、無一不
遷變、目前見証相、如何不厭離、

11 大般若波羅蜜多經 難聞功德品之六段 修習而般涅槃、何以故、舍利子、我以佛眼觀見証知、稱譽讚歎是善男子、善女人等所獲功德、

12 文殊師利佛土嚴淨經 地當六反動、設我言至誠、真正不虛詐、由是見証明、虛空宣伎樂、

13 五佛頂三昧陀羅尼經 卷二 行相三昧耶品 如是想法三十旬日、靜斷諸論每日三時、得見証地三摩地門、

(4) 「見証三昧」「見証罪」

14の「見証三昧」は、「不見証三昧」とあり、「三昧を見証せず」という読みが想定される。よって、「見証」は、動詞として使われていると考えられる。「見証」の意味としては、「はっきりと記して表す」という意味であらう。「見証」を動詞として使っているという点で、日本の「見証す」と通じるところがあるが、意味は先の淮南子の「見証」の意味の「はっきり表れたしるし」と通じ、日本の「見証す」の意味である「双六、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」とは異なる。よって、この例のような仏典の「見証」と日本の「見証」が関連し合っているとは言い難い。

14 大方等大集經 卷三 觀察品 戒彼得多聞不可説、証此三

味真思惟。若以不見証三昧、一切盲者應知、亦不以見非不、

(5) 「見証罪」

15の「見証罪」は、「如是地獄中有三種証罪」とあり、「地獄にある三種の証罪」について述べている。その三種の証罪（見証罪・聞証罪・疑証罪）の一つが、「見証罪」であるとする。よって、「見証罪」は、「見」と「証罪」に分かれると考えられる。よって、「見証」という漢語の例とはならないであらう。

15 十誦律 卷四十九第八誦之二 聖人故壽終必當墮、如是地獄中有三種証罪、見証罪、聞証罪、疑証罪、有三法、

(6) 動詞の「見証」

次に「見証」という形式で動詞として使われた例を挙げる。16の「見証心解」は、「見証して心解し」と読むと解され、「見証」は動詞であると考えられる。「見証」の意味は、「真の自己を見極め、悟りを開く」という意味であらう。17の「所見証至淨」とは、「見証するところ淨に至り」と読むと解され、この「見証」も、動詞であると考えられる。「見証」の意味は、16と同じであらう。18の「樹木曲躬有似。道人見証」とは、「樹木の

折れ曲がった姿が跪拜の姿に似ているので、道行く人は、それを見て自己の本性をはっきりと悟った」という意味であると解され、「見証」は、「道人、見証し」のように読むと想定できることから動詞であると考えられる。「見証」の意味は、16や17と同じであろう。これらの「見証」はみな、漢語動詞の「見証」の例であろう。意味は、いずれも「真の自己を見極め、悟りを開く」と考えられ、仏教語としての性質を有する。

16 鹿母經 力士聚中有八千人、見証心解、除放逸行、皆發無上正真之道、

17 摩竭梵志經 有慧行及離苦、黠除凶見淨徑、斷所見証至淨至淨、

18 雜譬喻經 卷上 樹木曲躬有似跪拜、道人見証、讚敘施主、國王驚肅怪其所以、

なお、日本で成立した仏教書にも、「見証」の例が認められる。意味は、中国の仏典の「見証」と同じである。

19 証中見証ナルカ故ニ夢中説夢ヌナリ（正法眼蔵 夢中説夢）¹⁰

右の「正法眼蔵」の「見証」は、形容動詞語幹として使われている。「悟りがはっきりと表れること」という意味であり、先

に挙げた中国の仏典の「見証」と同じ意味である。

以上、例を挙げて述べてきた仏典の「見証」の意味は、『日本国語大辞典』にもあるように「仏語 真の仏性を見きわめること。すでにさとっている自己を知ること。」として解することができる。

中国文献のうち漢籍と仏典の「見証」の意味を比べると、仏典にはその内容上、仏教的な意味が加わるものの、基本的には、漢籍も仏典も、「はっきりと表れたしるし」「はっきりと表れること」という意味で共通していると考えられる。

四 日本の文献における「見証」

四―「源氏物語」および擬古物語の「見証」

まず、平安時代の和文のうち、「源氏物語」の「見証」の例を挙げ、その意味について確認する。用例は、『新編日本古典文学全集』¹¹による。（以下、『新編源氏』と表記する。）

1 侍従の君、見証^{けんぜ}したまふとて近うさぶらひたまふに、（源氏物語 竹河 ⑤76頁4行目）

2 「御碁^{ごぎ}の見証^{けんぜ}ゆるされにけるをや」とて、（源氏物語 竹河 ⑤76頁6行目）

3 かの御碁^{ごぎ}の見証^{けんぜ}せし夕暮^{ゆぐ}のことと言ひ出でて（源氏物語

竹河 ⑤84頁12行目

右に挙げた「見証」の意味は、いずれも、『日本国語大辞典』に挙げているように、「①碁、すごろく、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」という意味である。用例1から3の場面は、中の君と大君が碁を打っており、二人の傍に藤侍従が立ち合っており、勝負の成り行きを見届け、判定するというものである。『新編源氏⑤』76頁の頭注には、「碁・双六などの遊戯で勝負を見届けること。」とある。なお、1と3の「見証」は動詞であり、2の「見証」は名詞である。

次に、擬古物語の「見証」の意味を確認する。

- 4 け近き限りの人々さし集ひて、見証^{けんぜ}し、もの言ひなどすれば、君もつましげならず、華やかにうち笑ひなどして、(石清水物語上巻 24頁7行目)¹²

右の例の「見証」の意味は、「源氏物語」と同じように、「①碁、すごろく、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」という意味である。この場面は、東の対の姫君と中納言という若い女房が碁を打ち合っており、その勝負を「見証」するのは、「け近き限りの人々」とあるように、そばに仕える女房たちである。

- 5 例の宮の君参り給へれば、碁盤^{こばん}召して御碁など打たせ給ふに、大臣^{おとど}は見証^{けんぜ}し給ひつつ、何とやらん石とりかくし何かといづ方の御ためもよからぬことのみし給ふを、(いはでしのぶ 巻一 68頁5行目)¹³

右の例の「見証」の意味も、「碁、すごろく、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」という意味である。この場面は、宮の君と一品宮が碁を打っており、「見証」するのは、大臣である。

- 6 ひる 昼^{ひる}つ方参りたまへれば、大宮、こなたにおはしまして、もろともに碁うたせたまふなりけりとて、「参りて見証^{けんぜ}をも仕^{つか}ふまつるべかりけれ」とて、(狭衣物語巻一 91頁12行目)¹⁴

右の例の「見証」の意味も、「碁、すごろく、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」という意味である。この場面は、源氏の宮と母宮が碁を打っており、「見証」するのは、狭衣である。

このように、「源氏物語」を模して作られた擬古物語の「見証」も、「源氏物語」と同じ意味で使われている。「見証」の対象となる遊戯としては「碁」が多いが、これは、平安貴族の生活を題材にしたという、物語の内容によるのであろう。

なお、「源氏物語」および擬古物語に見られる「見証」は、すべて仮名表記であり、「見証」と漢字表記された例は見られない。しかしながら、後に示す「今昔物語集」や古記録類で「見証」と書かれた語の意味と、「けんそ」などの平仮名表記の意味とを照合すると、平仮名表記を、「見証」の例と見なすことができる。

四―二 説話における「見証」

次に、説話に見られる「見証」の意味を確認する。

1 は、「今昔物語集」の「見証」の例である。

1 其後、幾ク程ヲ不経スシテ、主ノ許ニシテ、同様也ケル侍ト双六ヲ打合ケリ。二千度詣ノ侍、多ク負テ、可渡キ物ノ无カリケルヲ、

〔強ニ責ケレハ、思ヒ侘テ云ク、「我レ、露持タル物无シ。只今、貯ヘタル物トテハ、清水ノ二千度詣タル事ナム有ルヲ、其レヲ渡タサムト」

云ヘハ、傍ニ見証スル者共、此レヲ聞テ、（巻十六 大系本③） 497
頁7行目 清水二千度詣男、打入双六語第卅七）¹⁵

「今昔物語集」の「見証」の意味も、「源氏物語」と同じく、「碁、すごろく、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」という意味である。ここで、「見証する」ことの対象となる遊戯は、双六である。なお、『日本古典文学大系』の当該箇

所の頭注には、次のように解説される。表記としては、「顕証」とも書くことを指摘する。なお、「見証」と「顕証」の関係については、後に述べる。

勝敗を判定する為、第三者が立ち会うこと。「顕証」とも書く。延宝七年序刊の齊東俗談に「居家必用曰、顕証謂知見争端之人也、又陳遵曰、左旁知状謂之見証、今モ鞠ナドノトキ、旁ニテミル証人ヲ顕証ト云ナリ」と記す。かな文学では、「けんそうす」と直音でいい、更に「けんそ」と短呼した。（ケンジョと短呼することは、名目抄に見える）（頭注九 496頁）

「古今著聞集」には、「蹴鞠」を「見証」の対象とした例がみられる。「見証」の意味は、平安時代の和文や先に挙げた「今昔物語集」の「見証」と同じである。

2 民部卿、見証せられて、「これ程の事に成ぬれば、ともかく

もいふべき事にあらず」とぞいはれる。（大系 327頁4行目）

3 孝道入道、仁和寺の家にて或人と双六をうちけるを、隣にある越前房といふ僧きたりて、見所すとて、さまざまのさかしらをしけるを、にくしくしと思けれど、物もいはいでうちあたりけるに、此僧さかしらしして立ぬ。（大系 439頁11行目）¹⁶

2の「見証」は、民部卿が侍従大納言成通の蹴鞠の勝負を傍で見届けることをいう。3の「見証」は、孝道入道と或る人が双六を打っているところを越前房という僧が傍で勝負を見届けることをいう。「見所」の「所」は、平仮名「そ」の字母「所」の影響を受けたものであろうか。この「見所」も、「見証」と意味は同じである。2、3の「見証」とともに、「源氏物語」の「見証」と同じ意味である。

四―三 古記録や有職故実関係資料における「見証」

次に、古記録や、宮中の行事について説明した有職故実関係資料によって、「見証」の意味を確認する。なお、用例は成立順に示す。

1の例は、「中右記」の永長元年（一〇九六年）の記事である。「見証」の対象は「闘鶏之遊」で、蹴鞠などのような宮中で公式に行う行事ではなく、左大弁邸の門前で若君達が行っている遊戯である。「左大弁門前、而雑人成市、門前見証」とあるように、ここでは群がり集まる「雑人」が、「見証」を行っている。ここでの「見証」は、勝負の行方を見届ける雑人たちが、若君達の「闘鶏之遊」を、傍で見ているという内容である。したがって、「見物人」の意味で「見証」が使われているようである。「源氏物語」などの「勝負を判定するため第三者が立ち合う」のような、正式な判定を行う役目を担う人という意味では

ない。

2の例も、勝負の判定を行う役目を担う人という意味ではなく、「見物人」の意味であろう。ここでの「見証」の対象は「騎射」で、大殿の女房が乗った三十両ほどの車が密かに騎射を見物しているのである。ここでの「見証」の意味は、「日本国語大辞典」で挙げられている②の意味であろう。

3、4の例は、「吾妻鏡」の例でそれぞれ建仁二年（一二〇二）と康元二年（一二五七）の記事である。

3の「見証」の遊戯の対象は「蹴鞠」で、御所で行われた宮廷行事である。伯耆少将や北条五郎らは脚気を患っていたので、競技者であるところ、見証する役を務めたという内容であろう。ここでの「見証」の意味は、「源氏物語」などに見られる「若、すごろく、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」という意味である。4の「見証」の遊戯の対象も「蹴鞠」である。仁和寺三位能清朝臣や範忠朝臣や範方等が見証する役を務めたという内容である。4の「見証」の意味も、「源氏物語」などに見られる「見証」と同じ意味である。

5の例は、御前の蹴鞠の宴での「見証座」について書かれた例である。「貞治二年御鞠記」は、一三六三年成立で、内裏における蹴鞠の儀について、記録した書である。「東の庭の南の砌に、南北へ小文畳一帖を敷て、前閔白の座とす。其末に東西へ同畳二帖をしきて、見証の公卿の座とす。」とあり、閔白の末座

に「見証座」を据えたとある。「蹴鞠の判定する役目」として、試合を判定する人という意味なので、「源氏物語」の「見証」と同じである。

6の例は、准后が蹴鞠の結果を見届けたという意味で、「試合の結果を判定する」という意味である。

7、8の例は、南北朝時代に著された「遊庭秘鈔」に見える「見証」である。同書によると、御前の蹴鞠では判定役が座る「見証座」が必ず必要であり、その座は格別にしつらえるべきであることが記されている。8の内容は、蹴鞠には必ず見証座が必要で、その座は、院がいっしょの堂の上ではなく堂の下に設けるべきであるが、入道相国が「見証」をしたときには、その座を堂の上に設け、古老のあざけりの対象となったという内容である。なお、ここでの「見証」は、「見所」と書かれている。

9の例も、「見証座」の例である。「見証」の役を勤める人が座る場所を「見証座」とし、「東方座」とあり、位置が定められている。ここでの「見証」（勝負の判定）の対象は、「次第舞之」とあるように、「舞」である。ただし、おそらくここでは五節の舞を指すと考えられ、この「舞」に勝負があったとは考えにくい。よって、ここでは、勝負の判定を行う役目ではなく、「見届け人」として列席した人物であると考えられる。

10の例は、舞の場に設けられた「見証座」の例である。ここ

での「見証」は、「判定する役割の人」という意味である。

11の例は、「年貢分限等」について、くわしく「見証」のうえ、執行せよという沙汰が出された内容で、ここでの「見証」は、「見て明らかにする」という意味である。おそらく、傍で、「年貢分限等」の調査に立ち合うことを「見証」と表現したのであろう。ここでの「見証」は、試合の判定役という意味ではなく、納めるべき年貢を根拠に基づいて見定めるという意味であらう。ここでの「見証」は、「判断を下すべき人物」であり、試合を見て楽しむ「見物人」という意味ではない。したがって、「試合の判定人」の意味に近い。しかし、対象が遊戯ではないという点で、他の「見証」と意味が異なると考えられる例である。

12の例は、「勝負事を判定する」という意味の「見証」である。おそらく、白馬節会で催された舞の優劣を判定することを指すのであろう。人材がいいため、抜頭、三節会・叙位などの年中公事は、薩戒記の筆者が宮中に出仕して、見証を務めるように、後小松院から仰せがあったことを述べた内容である。なお、「薩戒記」は中山定親の日記で、十五世紀上半期の成立である。

13の例は、新続古今和歌集に藏人右中弁資任・一色五郎・伊勢守貞国・飯尾肥前守為種等の歌が入撰したことについて、万里小路時房が異論を述べたものである。資任・五郎等は歌に関してはなはだ初心者であるが、室町殿で行われた和歌の御会で、

彼らが詠進したところ、見証が設けられなかったために、彼らの歌が選ばれたという内容である。ここでの「見証」は、「碁双六、蹴鞠などの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと」の意味で、ここで判定する対象は、將軍の御前で読まれた和歌の良し悪しについてである。

「見証」の意味としては、「判定役」という点で従来と同じであるが、これまで「囲碁」「蹴鞠」といった試合の判定が多かったのに対し、ここでは和歌の選集における判定役ということから「見証」として判定する対象が拡がったのかもしれない。

なお、『建内記』は、公卿万里小路時房が書いた日記で、成立は室町時代である。

14の例は、「見証座」とあり、その座を設置する位置について述べられている。ここでは「蹴鞠」が判定の対象であるが、堂上の「見証座」から、身分の高い人物が蹴鞠を見物しているようであり、勝敗を判定しているのではない。よって、「蹴鞠」という勝負を伴う行事ではあるが、ここでの「見証」も、「行事を見届ける」という意味で、「勝負の判定をする人」という意味ではないのであろう。

15の例は、「朔旦冬至の談合を見届け判定する」ことを「見証」としたという内容で、「蹴鞠」「舞」「碁」のような勝負事だけでなく、「談合」の見届け役にも「見証」が使われたことが分かる。

16の例は、「伝奏の領状拝受についての談合を見守る」役を「見証」としている。

17の「享徳二年晴之御鞠記」（一四五三年成立）の例は、宮中で行われた蹴鞠の見証役の公卿名と、その服装が記されている。ここでの「見証」の意味は、「試合の判定役」という意味である。

18の例は、「公事」の沙汰を見証と惣公文所が報告せよとの通達であろう。ここでの「見証」の意味は、「状況を判定する」という意味であろう。

19の例にある「見証座」は、ここでは高貴な身分の人が蹴鞠の遊戯を見物するために特別にあつらえた席という意味であろう。

20の例は、「嬉遊笑覧」に見られる「見証」の例である。意味は、「源氏物語」と同じく「試合の判定役」という意味である。「嬉遊笑覧」では、「見証」の意味について、「源氏物語」の竹河の例を挙げ、「勝負を傍に居て見るものをけんぞといへり」と説明する。「勝負を傍に居て見るもの」とあるが、「源氏物語」の例を挙げて説明しているところから、「見証」の意味を、試合の見物人ではなく、「試合の判定役」として考えていると思われる。なお、「嬉遊笑覧」は、文政十三年の発行で、喜多村信節が江戸の風俗や文化、芸について書いた書である。

以上、古記録や有職故実関係書に見られる「見証」の例を、時代順に並べ、「見証」の意味を確認してきた。意味としては、

「試合の判定役」と「見物人」という二つに分けられる。

成立の早い「中右記」に「見物人」の意味が見られ、その後は、「試合の判定役」と「見物人」という意味が、時代に関係なく現れるという状況である。したがって、一方から他方の意味への変化という過程は、ここからは見る事ができない。後述するが、「源氏物語」にも、「傍で見てゐる人」の意味で使われたと思われる「見証」があることから、「源氏物語」成立のころには、すでに二つの意味が存したものである。判定する対象としては、蹴鞠が最も多いが、甚や舞や和歌などの試合があり、試合ではない談合や年貢を対象にした例も存する。

1 次行左大弁門前、而雑人成市、門前見証、驚尋之處、若君達今有闘鶏之遊、仍空過了。(中右記3\36 永長元年三月十三日)

2 并大殿女房卅両許密々見物騎射、仍馬場見証、近来未有如此時者、(中右記3\54 永長元年五月六日)

3 廿日 葵亥 御所の御鞠なり。(中略) 伯耆少将・北条五郎等、脚氣を煩ふによつて、見証に候ぜず。(吾妻鏡 第十七 建仁二年五月廿日 『全訳吾妻鏡 三卷』67頁)¹⁷

4 九日 甲午 晴る。申の刻、御所の御鞠なり。(中略) 仁和寺三位・能清朝臣・範忠朝臣・範方等、見証に候す。(吾妻鏡 第四十七 正嘉元年四月九日 『全訳吾妻鏡 五卷』292)

頁)

5 まづ辰の時に為遠朝臣参りて。御装束揃。御殿の東西。議定所向御鞠懸五間に御簾をかけたしてこれをたる。南の三四間の前の簀子を切さげて。縹緗の帖一帖を供じて御座とす。東の庭の南の砌に。南北へ小文畳一帖を敷て。前閑白の座とす。其末に東西へ同畳二帖をしきて。見証の公卿の座とす。(貞治二年御鞠記 群書類従 第十九輯 卷第三百五十三)¹⁸

6 仍候便宜所、申半刻被如御鞠、(中略) 今日准后見証一人着座之外、公卿少々雖有之、不敷座也(『後深心院閑白記 六』永徳元年三十五日 129頁)¹⁹

7 座敷付見証座事 天子上皇の公宴にも御挺を切さげて御座をまうく。親王執柄以下堂に着座あるべからず。庭に座をしく。閑白、臣は大文畳。納言参議は小文のたたみ。殿上人紫端或は赤端畳。諸大夫以下侍輩又武家の人々は円座たるべし。雲客円座の例あり。ふるき鞠足必見所に候べし。座を各別に敷也。(『遊庭秘鈔』426頁 卷第三百五十五)²⁰

8 ふるき鞠足必見所に候べし。いかならん人も堂上見所有べからず。然を暦応比。仙洞に行幸成て御鞠会あり。花山院入道右府、家定公。近衛前閑白。基嗣公・洞院入道太政大臣。公賢公。堂上にて見証あり。是則深心院閑白。并常盤井入道相国此兩人。公宴御鞠を堂上にて見所せられ侍ける例なりと

なん。但老人のあざけり也と沙汰侍し也云々。(『遊庭秘鈔』
426頁 卷第三百五十五)

9 今日於院東洞院殿、有舞御覽事、行幸間也、(中略)南庭南方立三間幄屋、為左右楽屋、其前立大鼓・正鼓等如例、公卿已下着座之後舞人・楽人列立中門外、奏万秋楽破、參入打一鶏婁如恒、次楽人着砌下座、次第舞之、三条大納言・新大納言等着東方座、謂之見証座(『薩戒記 一』74頁 応永二十六年八月二十三日)²¹

10 舞人(中略)右 中興、忠信、忠国、多忠右、太神晴方、同行枝、見証座、三条大納言、久我大納言、舞御覽(『看聞日記 二』 応永三十年七月十九日 281頁)²²

11 一 矢野庄損亡事 不可叶之由、可仰下之由、衆儀了、披露之處、任所望、可有其沙汰、於料所者、年貢分限等、委細間見証上者、任例可有執行之由、衆儀了、(『東寺百合文庫』 応永三十二年九月廿日 368頁)²³

12 白馬節会令參事、御教書到来、今年聊可有猶予款、可然様可被申沙汰者、又以消息付女房申入院、被仰云、近例已れん綿之上、參議拔頭、三節会・叙位彼是都無人、非斟酌之限、当年中公事汝若令見証者、(『薩戒記 五』 65頁 永享四年一月三日)
13 後聞、藏人右中弁資任・一色五郎・伊勢守貞国・飯尾肥前守為種等歌今度入撰集、室町殿被御覽之、撰者頗違時宜款、其故ハ資任・五郎等堅固初心以外事也、乍去於室町殿和歌御

会面々詠進之處、見証不可然之間、為被催後學被召加許也、而入勅撰之条不足言事也(『建内記 二』 368頁 永享十一年六月二十八日)²⁴

14 而一向被構入鞠場、剩後ノ縁マテ被廻入之、件縁已成狭少、着装束之人難往返歟、不便、御鞠ヲハ自記六所棟落ル鞠直ニ懸ノ庭ヘ受テ誠ニ可然、且為見証坐歟、西へ入壁ヲ被構出候故也、(『建内記 二』 368頁 永享十一年六月二十二日)

15 宣下文章申談前撰政之由、奉行職事称之、而前撰政者、非我所為只一見計之由、被陳云々、次大外記退散、此沙汰関白如見証歟如何、(『建内記 四』 132頁 嘉吉元年閏九月二十一日)

16 下臈閣予被仰之条、且不可然、近日每事見証無勿体之間、必存知可然之由、出座以前以中將先承了。(『建内記 四』 191頁 嘉吉元年閏十月二十一日)

17 見証公卿 関白。左大臣。平細直衣指貫。應平。二条持通。三条前内大臣。直衣。衣冠。
武者小路前内大臣。公家。平細直衣白綾指貫。三條前内大臣。公家。直衣。西園寺中納言。実通。直衣。(『享徳二年晴之御鞠記』 390頁)²⁵

18 一 就当庄万事御公事等申沙汰人体事、如近年者、大略上略上使一人而、是非申入事不可然云々、於向後者、惣公文所可申存知云々、雖然、上使一向不可申、見証公文所相共、可申入云々、(『東寺百合文庫』 享徳三年七月十八日 296頁)²⁶

19 今日室町殿御鞠始也、鞠足之人々座定之後、前内府進出、着見証座、公卿、殿上人東上北面、武家輩東上南面、自屏中門、

南座也、賀茂輩南上東面、屏中門南殿、見証座副北垣、其次武家輩座也、(『親長卿記』 文明六年四月廿五日 21頁)²⁷

20 又勝負を傍に居て見るものをけんぞといへり、(源氏)【竹川】玉かつらの姫君兄弟碁をうつに姫君の弟侍従の君けんぞし給とて近う侍ひ給ふといふ事あり注に見証なり鞠などにもありといへり。(『嬉遊笑覧』 四 雑伎)²⁸

五 見証と顕証

さて、ここで、「見証」と「顕証」という語が、平仮名文で混乱が生じているかどうかについて確認しておきたい。「源氏物語」では、「顕証」と「見証」は、すべて平仮名で表記されている。したがって、表記から、「見証」か「顕証」かということ判断することはできない。「見証」か「顕証」かということを区別するためには、「見証」と「顕証」の意味の違いを明らかにしたうえで、個々の例を判定することが必要である。

まず、「源氏物語」の古注釈で「見証」と「顕証」の間で、混乱が生じていることを確認する。

- 1 けそうに人しけく 顕証 又見証 (『河海抄 卷十』 390上 4行目 玉鬘)²⁹
- 2 かのたくれのけんそうなりけんに、顕証あらはなる心也 見証

伊勢物語真名本 (『河海抄 卷十六』 541下17行目 竹河)

3 けせうにはしたなきさま 顕証 (『河海抄 十八』 571下1行目 宿木)

4 そゝるなるけんそうの人をさへまとはし給てそらことをさへせさせ給よといへは 顕証 遊信(真本極信)の人歟 見証歟(真本)

細字 (『河海抄 卷十九』 583上14行目 浮舟)

5 けそうの人は 顕証人 又見所人 (『河海抄 卷二十』 604上7行目 夢浮橋)

6 御碁の見証せし (『花鳥余情 第二十四』 282下1行目)³⁰

7 けそうの人なんいかなることにかと けそうは見証也 そはあたりの人をいふなり (『花鳥余情 第三十』 348上10行目)

1から5は、「河海抄」の例であるが、「見証」と「顕証」に混乱が見られる。6と7は、「花鳥余情」の例であるが、「見証」と「顕証」との間に混乱は見られない。

1は「けそう」に対して、「顕証 又見証」とあり混乱が見られる。「源氏物語」でこれと該当する箇所は、次の8である。ここでは、「人目に付く」という意味なので、『新編源氏』で表記されているように、「顕証」が該当するであろう、

8 住みたまふべき御方御覧するに、南の町には、いたづらなる対どもなどなし、勢ひことに住みみちたまへれば、顕証

に人しげくもあるべし。(新編源氏③ 玉鬘 125頁4行目 大成表記「けせう」)

「河海抄」の2の例も、「顕証」と「見証」があり、混乱がある。2の対応箇所は、次の9である。

9 かの慰めたまはむ御さま、つゆばかりうれしと思ふべき
気色けしきもなければ、げにかの夕暮の顕証けんそうなりけんに、いとどか
うあやにくなる心はそひたるならんことわりに思ひて、
(新編源氏⑤ 竹河 85頁4行目 大成表記「けんそう」)

9の例の「顕証なりけんに」とあるところは、「はっきりと見える」という意味である。したがって、この箇所では「顕証」が該当する。当該箇所の「顕証」について、『新編源氏』の頭注には、「顕証」は、あらわであるさま。前に「かの御碁の見証せし夕暮」とあったのに合わせた洒落。(新編源氏 頭注二四85頁)とある。また、『源氏物語注釈九』(156頁)にも、この箇所の「顕証」について、「前述の「かの御碁の見証せし夕暮れ」の「見証せし」を「顕証なりけん」と置き換えた語り手の機知的表现である。」とある。この「顕証」は、直前の次の文章10を踏まえたものである。ここでは、「碁の判定役」という意味なので、「見証」が該当する。

このように、9の「顕証」は、10の「見証」を踏まえた「洒落」「機知的表现」である。このような機知的表现が可能になる背景には、「見証」と「顕証」の意味が異なっており、それぞれ使い分けられていたことが前提となる。よって、この箇所を見る限り、「源氏物語」では「見証」と「顕証」は区別されていたことになる。

10 かの御碁ごぎの見証けんそうせし夕暮のことも言ひ出でて、(新編源氏⑤ 竹河 84頁12行 「大成表記 けんそ」)

「河海抄」の4の例も、「見証歟」とあり、「顕証」と「見証」が混乱している。

この箇所に該当する「源氏物語」の本文は、次の11である。本文にあるように『新編源氏』では、「眷属」と表記している。当該箇所の「眷属」については、『源氏物語大成 索引』では、「けそう」という見出しを立て、【顕証——説 眷属】とし、「眷属」と解する説もあることを指摘する。ここでの仮名表記の「けそう」を、「匂宮の従者」と考えて「眷属」とするのであろう。なお、『新編源氏⑥』の当該箇所の現代語訳は「かかわりのない手前ども」としており、その意味で「眷属」を当てているのであろう。

筆者の見解としては、この箇所は、まず「はっきりと見える」

の意味の「顕証」は除外してよいと考える。「見証」も、「源氏物語」の「見証」が「碁・双六の審判者」という意味だとするとここでは該当しない。「従者」を意味する「眷属」が候補として考えられる。ただし、古記録に見られるような「試合に限らず、様々な事象を傍で見える人、見物人」という意味を、「源氏物語」のこの箇所「見証」に適用してよいなら、「見証」も候補になる。女性に対する匂宮のふるまいを傍で見える人、すなわち従者という構図が想定される。「眷属」か「見証」か、やはり不明と言わざるを得ない。ここでは、当該箇所の「けんぞ」について、古注等で異なる見解があることの指摘に止めたい。

11 「すずろなる眷属けぞうの人をさへまどはしたまひて、そらごとをさへせさせたまふよ」と言へば（新編源氏⑥ 浮舟 134頁11行目 大成表記「けぞう」）

「河海抄」の5の例も、「見証」と「顕証」で乱れがある。12に、「源氏物語」の該当箇所を示す。『新編源氏⑥』では「顕証」と表記し、この箇所の「顕証の人」の現代語訳を「はたの者」としている。『新編源氏』（390頁頭注一三）では、「顕証の人」について、「顕証の人は、そばで見ている者。『けんぞ』ともよみ、碁・双六の審判者または見物人という意に用いることもある。」としている。これに従えば、この箇所を「顕証」で解すること

もできるのであるが、「碁・双六の審判者」の意味としては、「見証」が使われていること、この意味が拡大した「見物人」「そばで見える人」の意味に当たるのは「顕証」ではなく「見証」だと考えられることから、「源氏物語」の当該箇所は「見証」を当てるほうがよいと考える。「傍で見える人」「見物人」の意味の「見証」は、先に述べたように「中右記」で使われている。なお、先に挙げた7の花鳥余情では「見証」と解している。

12 顕証けんしょうの人なん、いかなることにかと心得がたくはべるを、なほのたまはせよ。（新編源氏⑥ 夢浮橋 390頁14行目 大成表記「けさう」）

このように、「河海抄」で、「見証」と「顕証」の間には混乱が生じている。ただし、「源氏物語」で確認したところ「碁の審判者」の意味では「見証」、「はつきり見えること」という意味では「顕証」と分けることが可能である。「源氏物語」で「顕証」とされる例を13、14、15に示す。いずれも「はつきり見える」という意味である。前者の「見証」は主に動詞として使われ、後者の「顕証」は形容動詞もしくは連体修飾語の成分として使われているという文法的違いも存する。

13 「客人まろうどは、かく顕証けんしょうにこれかれにも口入れさせず、忍びやか

に、造りかへんの心にてなん」とのたまへば、(新編源氏⑤ 竹河 247頁9行目 大成表記「けんそう」)

14 この老人の、おのがじ語らひて、顕証にささめき、さは言へど、深からぬけに「、老いひがめる」にや、いとほしくぞ見ゆる。(新編源氏⑤ 竹河 247頁13行目 大成表記「けんそう」)

15 あるまじきこととは深く思ひたまへるものから、顕証に、はしたなきさまにはえもてなしたまはぬも、(新編源氏⑤ 竹河 452頁9行目 大成表記「けんそう」)

なお、「顕証」は中国文献に用例が見えないことから、日本で成立した漢語の可能性が高い。日本の古辞書には、「顕証」を掲載しているものもある。12によれば、「顕証」の意味を「争の端を知見する人を謂う」とある。このような例は、先に挙げたように古文書の「見証」で談合の判定者の例があることと関連しているであろう。この点、「見証」と「顕証」は、同じ語に対して漢字表記を書き換えたようにも見える。このような例も確かに存するものの、「源氏物語」のような早い時期の「見証」と「顕証」は意味を異にする別語であると筆者は考える。

16 (顕)証 必用 謂下知見スル争ノ端ヲ一人ヲ上 (書言字考 節用集 第十一冊 ⑫3行目)

また、次の17のように、「小右記」に「顕証」の例が見出される。この例の「顕証」について、『小右記注釈』³¹では、「特に重要な役所。「顕証」は「けんぞ」「けんそう」「けんしょ」「けしょう」とも。表に物事がはつきり現れていること。きわだっていること。」(上巻220頁)と注されており、「源氏物語」の「顕証」と同じ意味である。

17 非顕証之諸司、成功之輩、皆蒙其實、何矧於斯勤 (小右記八 長元四年二月 232頁1行目)

また、18のように、「大鏡」³²でも、「顕証」は「はつきり現れること」という意味で使われている。

18 有明の月のいみじく明かかりければ、「顕証」にこそありけり。 (花山院 45頁4行目)

このように日本において「顕証」は、基本的には「源氏物語」の「顕証」と同じ「はつきり現れること」という意味で使われているといえよう。

六 近代の「見証」

以上述べてきたように、近世までは、「見証」は、「試合の勝敗を見極めるために立ち合うこと」「傍で事のなりゆきを見ること。またその人。」「真の仏性を見きわめること」という意味で使われてきた。本節では、近代以後の「見証」の意味について確認する。以下、青空文庫のキーワード検索を使って集めた用例を示す。

1の「見証」は、「仏や神を実際に見ることで悟りを開くこと」という意味である。この「見証」は、仏教語の「見証」の流れを汲むと言える。2の「見証」は、「実際に見て証を立てる」という意味であろう。この意味は、先に挙げたように、「東寺百合文書」などに用例がある。したがって、この「見証」は、近代になって新たに生まれた意味ではなく、近世以前の「見証」の意味を継いだものである。この「見証」は、果し合いの結果を見定める立会人という意味であり、「実際に見て証を立てる」という意味であるが、「果し合い」という勝負を伴う具体的な対象が示されており、「源氏物語」などに存する「碁」などの勝負を立ち合って見定めるという意味に近い。ただし、これは江戸時代の果し合いを題材にした作品であり、純粹に近代の例とはいえない。3の「見証」も、「見て確認する」という意味である

う。4は「実地見証」という四字熟語の例である。

このように、近代の「見証」は、仏教語的な意味の「見証」と、「試合とはかわりのない事象について、何かの事実を見て証を立てる」という意味で使われている。これは、近世までの「見証」の意味を引き継いだといえるが、「碁や双六などの遊戯の判定役をする」という意味は失われている。

1 基督の信は、常に衷に神を見、神の声を聴きけるより来たり、ポーロの信は、其のダマスコ途上驚絶の天光に接したるより湧き出でたり。菩提樹下の見証や、ハルラ山洞の光耀や、今一々煩はしく挙証せざるも、真の見神の、偉大なる信念の根柢たり、又根柢たるべきは了々火よりも燎らかなり。(予が見神の実験 綱島梁川 明治38年)

2 「なるほど、それは果し状をつける値打がござりますわいの、及ばずながら、見証の役目は妾がお引受けしましょう程に、立派におやりなされませ」(剣難女難 吉川英治 大正14年)

3 で、要するに、唯一の証拠は女中の見証だけだったのです。然し見証というものは直接証拠となり得ません。女中が着物の縞柄さえ記憶して居て、それによって男が逮捕されたのですから女中の見証は間ちがいない筈ですけど、偶然同じ着物を着て、同じ痣を持ったものがこの世の中に、もう一人無いとは限りません。(三つの痣 小酒井不木 大正15年)

4 二人の目撃者の相互の位置は一間ほど離れており、また椅子の向きも少しがっていたので、私は二人の各位置について、そのおのおの見たという光の通路の方向を实地見証してみた。(人魂の一つの場合 寺田寅彦 昭和18年)

七 ま と め

以上、「見証」について、その成立課程と、日本における意味について様々な資料を取り上げ、検討してきた。分かったことをまとめると次のようになる。

1 「勝負の判定をする」「傍で見物する」という意味の「見証」は中国から受容されたのではなく、日本で成立したと考えられる。

2 「見証」の意味には、①「碁や蹴鞠などの試合を判定する」という意味や、②「試合などを傍で見物する」という意味があり、「源氏物語」では①の意味のほかに、②の意味にも解される例があり、①②のどちらの意味が早いかは判じがたい。その後、近代にいたるまで、「見証」の意味は変化せず、継承されるが、①の意味では使われない傾向になる。

3 「河海抄」で仮名表記の本文に「見証」を充てるか「顕証」を充てるかで混乱している。節用集や現代の注釈書において

も、「傍で見ている人」の意味を「顕証」とするなど、混乱が生じている。

4 「源氏物語」において、「眷属」「見証」「顕証」の表記をめぐって、説が分かれている。

5 「源氏物語」の「見証」は「碁を第三者の立場で判定する」(動詞)の意味で、「顕証」は「はっきり見える状態である」(形容動詞)という意味で区別できる。

「見証」は、勝負事の判定のルールとして、その必要性から日本で作られた漢語である。事物、事態、概念が新たに生じることに対応して漢語が作られていく過程を「見証」に見ることができる。「見証」は、年中行事に関わる語として新たに生じた語であり、日本における漢語成立の特徴をよく示す事例として位置づけられる。

注

- 1 『日本国語大辞典』(第一刷 二〇〇一年 小学館)による。
- 2 『色葉字類抄研究並びに索引』(中田祝夫 峯岸明共著 風間書房 一九六四年)による。
- 3 『改訂版 書言字考節用集 研究並びに索引』(中田祝夫 小林祥次郎著 勉誠社出版 平成十八年)による。
- 4 『古本節用集六種研究並びに総合索引』(中田祝夫著 勉誠社 一九七九年)による。
- 5 『修訂版 大漢和辞典』(第二版 大修館書店 平成二年三月)に

- よる。
- 6 中央研究院漢籍電子文獻の検索を利用して、中国文献における「見証」の使用状況を確認した。
- 7 『新釈漢文大系55 淮南子 中』（明治書院 昭和五十七年）による。
- 8 S&T 大正新脩大藏經テキストデータベース二〇一八年版（東京大学）を利用した。
- 9 『国訳大藏經 経部 第十三卷』（昭和五十年発行 国民文庫刊行会編 第一書房）による。
- 10 『正法眼藏（両足院叢書）』（京都大学文学部国語学国文学研究室 平成十八年七月三十日初版発行 臨川書店 四〇五頁）による。
- 11 『新編日本古典文学全集 源氏物語』（阿部秋生他 校注・訳 小学館 一九九四年）による。
- 12 『中世王朝物語全集5 石清水物語』（三角洋一校訂訳者 笠間書院 二〇一六年 第一刷）による。
- 13 『中世王朝物語全集4 いはでしのお』（永井和子校訂訳者 笠間書院 二〇一七年 第一刷）による。
- 14 『新編日本古典文学全集29 狭衣物語』（小町谷照彦校注訳者 一九九九年 第一刷）による。
- 15 『日本古典文学大系 今昔物語集』（山田孝雄 山田忠雄 山田英雄 山田俊雄他注 岩波書店 一九五九年）による。
- 16 『日本古典文学大系 84 一九六六年』（永瀬安明 島田勇雄 校注 岩波書店）による。凡例によれば、本文中による振仮名は、すべて校訂者によるものとされる。
- 17 本文は『全訳 吾妻鏡 第三卷』（昭和五十二年発行 貴志正造訳注 新人物往来社）による。凡例には、「難読語、特に地名、社寺名、官職名等には、煩を厭わず振仮名を付けた。」とある。
- 18 『群書類従 第十九輯 管弦部』による。
- 19 『大日本古記録 後深心院関白記 六』（二〇一五年 第一刷 東京大学史料編纂所発行 岩波書店）による。
- 20 『群書類従 第十九輯 蹴鞠部』による。
- 21 『大日本古記録』第一刷 薩戒記一（二〇〇〇年 第一刷 薩戒記五 二〇一三年第一刷 東京大学史料編纂所 岩波書店）による。
- 22 『図書寮叢刊 看聞日記 二』（平成十六年発行 宮内庁書陵部）『大日本古文書 家わけ 第十 東寺文書之三（百合文書 へ下―ち上）』（『大日本古文書 家わけ十ノ三』 昭和四十五年十一月二十日 覆刻 東京大学史料編纂所 東京大学出版会）による。
- 23 『大日本古記録』第一刷（昭和四十一年 東京大学史料編纂所 岩波書店）による。
- 24 『群書類従 第十九輯』による。
- 25 『大日本古文書 家わけ 第十 東寺文書之五（百合文書）』（昭和二十八年三月二十五日発行 東京大学史料編纂所 東京大学出版会）による。
- 26 『史料纂集12 親長卿記 第二』（平成十四年九月発行 平文社 続群書類従完成会発行）による。
- 27 国立国会図書館デジタルコレクションによる。（昭和二年初版五版『日本随筆大成』成光館出版）を利用した。
- 28 『紫明抄・河海抄』（玉上琢彌 編 昭和43年 角川書店）による。
- 29 『花鳥餘情』（源氏物語古註集成 第一巻）伊井春樹 編 昭和53年 桜楓社）による。
- 30 『小右記注釈』（小右記講読会発行 精興社 平成二十年）による。
- 31 『大鏡』（新編日本古典文学全集24 小学館 橋健二ほか校注・訳者 一九九六年）による。

